

第2回孫文・梅屋庄吉（東アジア・長崎近代交流史）常設展示整備構想策定委員会会議録（要旨）

| | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 開催日時 | 平成24年7月12日（木）午前10:00～12:00 |
| 開催場所 | 松藤プラザ「えきまえ」いきいきひろば |
| 出席委員 | 坂越委員長、池田副委員長、大堀委員、川島委員、小坂委員、姫野委員、横山委員、脇田委員 |
| 職員出席 | 宮崎文化振興課長、土井口企画監、山口総括課長補佐、草野課長補佐、辻課長補佐、佐藤課長補佐、山本係長、海江田係長、園田係長、松本学芸員 このほか、ワーキングチームメンバー（県市関係課長）等 |
| 会の成立 | 委員9名 出席者8名（委員の過半数の出席で成立） |
| 議題 | （1）第1回委員会意見等に対する対応について （2）常設展示の場所等について （3）機能について |
| <p>（1）第1回委員会意見等に対する対応について 事務局（県文化振興課）より説明意見等なし。</p> <p>（2）常設展示の場所等について 事務局より候補地4ヶ所にかかる検討結果を報告。 そのうち、1ヶ所を第1位候補地（展示可能面積約300㎡）として提案。 ただし、県と市で展示館としての位置づけに相違がある旨を説明。</p> <p>（委員）当該施設は妥当な結論であると思う。</p> <p>（委員）面積については、300㎡程度かなと思う。生涯学習講座であるとか、イベントあるいは市民参画だとかを全体含めると大体300㎡前後、400㎡程度であろう。しかもコンセプトなどをいろいろ考えるとワーキンググループで結論づけされた施設でいいと思う。</p> <p>（委員）梅屋関係の資料の重要性をわかっていただいて、だからこそそれが長崎で展示され、それが交流につながるということであるのであれば、ぜひ協力したい。その重要性、歴史的な重みというか、中国と日本において交流の中で本当に大事なものだというふうに理解されているもので、その辺のところを踏まえて議論もしていただきたいというふうに思っている。</p> <p>（委員）館の性格として、歴史文化博物館の分館という位置づけはできるのか。当該施設一帯はここだけではなく、中国との係わりがあるところが旧居留地や新地をはじめあるので、遺跡ゾーンと、新しい展示施設をどうつないで将来的に先行して整備していくか検討する必要があると思う。</p> <p>（委員）この施設には物語性があるので一番ふさわしいと思っている。面積については300㎡程度と狭い感じがする。スペース的に問題があるので、この展示館との連携、研究は長崎歴史文化博物館で行い、1階については国際交流の場としてソフト事業で人を集めるような場にできないかなということで、検討しているところである。全体を孫文梅屋記念常設展示館にするのではなく、すみ分けしながらアピールして集客を図りたいと考えている。</p> <p>（委員）基本的には展示活動と、それから交流活動と学習活動ということで3つの点で運営をしていかないといけない。そういう場として当該候補施設は魅力的である。</p> <p>（委員）特別企画展は1,000㎡、今度は300㎡であるので、最低でもその3分の1以下になるということで、前回のイメージから考えると大幅な縮小展示になると思う。</p> <p>（事務局）特別企画展の際は、明治・昭和時代の情景展示があり、大型の展示物の飛行機、孫文像のレプリカ等を</p> | |

展示しており、そういった雰囲気味わうための仕掛けを施してきたが今回は資料の展示のみであることから、何とか300㎡程度でやるのではないかなと思っている。

(委員)当該施設は法的な位置づけで博物館法が適用される博物館になりえるのか。法的な位置づけで機能や管理が変わることが懸念される。

(事務局)博物館法は、登録博物館と博物館相当施設と類似施設の3つに分けられる。登録博物館というのは教育委員会が所管しないとできないので、これはできない。長崎歴史文化博物館も同じである。したがって長崎歴史文化博物館は、博物館相当施設に位置づけられており、当該施設もそのような位置づけを目指していきたいと思う。

(委員)多様な近代のイメージに偏りが生まれ、展示がばらばらになる可能性が心配。

(委員長)今日も3,500人、ほとんど中国人が乗っているボイジャー・オブ・ザ・シーズの3隻目が入ってきて、街中、中国からのお客様であふれかえっている。当該施設付近を必ずお客様は通るので、もし立ち寄りような施設になれば、相当プラスになると思う。市民との交流や資料の調査、研究をする必要があるがマンパワーが足りないなど、いろいろな課題があるが、それは皆さんが指摘されているように長崎歴史文化博物館と連携したり、分館にするなどの方法を取って解決することが望ましいと思っている。したがって、当該施設を候補地として決定していきたいというふうに思う。

(3)機能について

(事務局)機能・運営について作業部会、ワーキング会議で検討していく必要があることから各委員からご意見をいただきたい。

(委員)来た人がそこで展示を見るだけで次に行くのではなく、そこにとどまって交流できる場というものをつくる、交流活動というものをすごくやらなくてはいけないことと思う。それからもう一つは、学習の場としての機能が必要であると思う。研究者などいろんな方の学習の場という形で設けたらいいのではと思う。

また梅屋と孫文の関係については、高校生や中学生に学んでもらわないといけない。その場合やはり県と市と、それから地元の大学、中国総領事館、これらの提携が必要である。また長崎における日中友好交流館という性格を持たせるべきではないか。そういう活動の母体をぜひ作っていただきたい。

(委員)博物館法で言う博物館の機能というのは、資料の収集、保管、あるいは調査、研究、そして教育活動というのが基本的な機能として挙げられる。これからの博物館を考えると多機能が求められる。当該施設が常設館となった場合に、たくさんの機能をここで果たしていくことは非常に難しいと思う。したがって長崎歴史文化博物館の分館的な性格といったようなものも考えられるんじゃないかというふうに思う。

(委員)機能として2つ付け加えていただきたい。将来を見据えてコアを作るという認識が必要である。その館だけで完結するのではなく、長崎歴史文化博物館と提携するという理解が必要である。その場合に、本館の方も中国やアジアの近代史を研究していただくセクションを館の一つの柱として立てていただいて、そこでも交流学習という機能を持たせ、新たな施設と連携する必要がある。新しい展示館として開く場合に、スペースも限られるのでICTの技術を取り入れる必要がある。また本館の方の機能というものを、中国関係のみならず長崎学についても情報発信機能ということを強化してほしい。2番目に、華僑の歴史について本館それから分館で本物の場所に行けばサテライトがあるということをきちんと見せてほしい。

(委員)この展示館というのは、大きく分けて2つの機能がある。1つは資料の収集、保存、展示、研究するというこれが基本軸としてある。もう一方に、交流という部分がある。その交流というものの中に、3つあり、1つは

市民とどう関わるかということ。2つ目は中国との問題、国際性的の問題。3つ目は長崎を越えていく部分。展示室が限定的である以上、デジタル博物館をある程度行う必要がある。長崎に関する部分については、デジタル化してウェブ博物館を一部つくっておくと、小・中学校の先生の郷土教育に使えるんじゃないかと、そういうものを充実させていって、展示館に来ると実物があるとかそういうことが必要であると考えている。ネット上なら多少欲張ってもできる。

(委員)おそらく展示物だけだと、素通りになると思うので、1階をうまく活用して、学習会や講演会などを行う必要がある。市民あるいは中国人向けさるくや、あるいは日本人向けにも中国語化さるくなど、一帯をうまく使って、まず展示館で勉強してからその他に行くというような感じを出せば興味を持ってくれる人もいると思う。

(委員長)長崎の将来戦略として、日中友好のシンボル県のような感じになれば、存在意義が非常に高まるものと思っている。孫文・梅屋というのは、その最たる象徴として、日中友好の一番のシンボルになるんだと。そういう意味では、日中友好交流館的な機能を持っていると非常にいいと思っている。そのコアの部分として、孫文と梅屋庄吉の友情ということを位置づけていければすごくいいと思っている。長崎県に中国の要人が来られたときに紹介できるような施設であれば、存在意義、長崎自体における価値も高まるものと思っている。2つめは、中国からの修学旅行が多いので、それを見ていただける場所があるということ自体が観光の魅力としてもプラスにもなるし日中友好を認知してもらえという意味でプラスになるものと思う。ただ、中国人だけでなく日本人の修学旅行生も寄ってもらえるような場所になればさらにプラス効果が大きいと思っている。それから、クルーズ客。松が枝で降りるクルーズ客とか、上海航路のお客さんにも見てもらう。VIPと修学旅行生と松が枝から降りてくるお客さんたち、この3つを押さえるだけでも相当存在意義があると思う。それから、長崎の近代化が弱いという部分を何とか補強したいという気持ちもあって、この施設が近代化、特に中国との交流を中心とした近代化の部分に焦点を当てた施設ということになった場合に、この施設単体ではできることはかなり限りがあるので、長崎歴史文化博物館の方でサポート機能を相当充実する必要があるが、近代化補強事業みたいなことを役所側も補完できるようなことを行って、長崎全体の近代化の底上げを図るという取りかかりとしてこの施設の近代化の要素を付加していけるといいと思っている。

(委員)当該施設の展示スペースでは長崎歴史文化博物館で開催した展示会のようにできないので、そういった意味ではウェブを使ったわかりやすく面白い展示が魅力的だと思う。また例えばシンガポールの孫文記念館では、子どもたち向けのプログラムを孫文記念館でやったり、そこでロックコンサートをやったりとか、孫文とは直接関係ないようなイベントをやりながらも、来ることによって交流を学んでもらうというような企画をたくさん行っている。

(委員)輝いた長崎の歴史をそこで見せる、という意味で近代博物館を将来的には置くという展望もぜひ持っていたら、長崎の町のつくりとこれから先の魅力づくりがうまくいくのではないかと。

(副委員長)当該施設に限ってはもう、スペースが限られているので、逆に今回はある程度絞りこんで展示等を行う必要がある。先ほどのウェブの話が出たが、3Dとかそのようなものを使って子供たちが本当に体験できるような、新しい資料館の見せ方というのを考えていけば非常におもしろいと思う。

(委員)横浜開港資料館の展示を参考にするとところがあるのではと思う。またシンガポールの博物館は、市民が特に年老いた方が、自分の子どもの時の話を語って、そのテープをそのまま流したり記録したりする。たとえば、上海長崎航路に乗ったことのある、見たことがある、そういう方が昔語りをする記録を早めにとっておく、それを流してみるとか、そういうことをやることによって、市民の方々が参加しているという雰囲気をつくってご家族が聞

きに行くというスタイルにシンガポールはなっている。そのような何か、形を整えて見に来るといふ、正しい形だけではなくて、長崎・上海航路の話でもいいし、あるいは昔の漁業の話でもいいし、何か、知っている方々が集まって語り合うような場を頻りに開く。この辺はシンガポールが一番うまくやっているので参考になると思う。

(委員)「音源」に関し、長崎県における収集というのが非常に遅れているのではないかと声がある。県立図書館が新しくなる機会にぜひそういうものを設置する必要があるし、博物館もそういう意味ではいろんな長崎の映像を集めているし、もっと軸として県が力を入れてやろうというふうにはやらないと、小さな声ではやっぱりなかなか難しいという印象がありますので、展示館をつくるという中で音源収集を検討していただきたい。

(委員)上海に分局のような、長崎にもこういう世界があるという情報発信の場所をつくっていただけたらありがたいと思う。

(事務局)上海事務所を活用できると思うし、上海孫中山記念館とも非常に良好な関係なので連携していく。

(委員)長崎歴史文化博物館は近世の長崎の海外交流を展示している。去年から今年にかけて、孫文・梅屋庄吉の展示会をやってみて、非常に評価は高かったと思う。長崎歴史文化博物館で行った展示会を今度の常設展と連結性を持たせる必要があるという意味で分館的な性格が必要であるというお話が出たんだろうと思う。予算、マンパワー等解決すべきことがあるのですぐにはできないとしても、できるだけこういう事については、時間をあまり置かないで展開できるようにすべきだと思う。

(委員長)本日、資料として「活用事例集」を第1回でお配りしたものと同じ物を配付している。次の第3回までに、本日ご意見があったように、いい運営をしている例とか機能の例が横浜開港記念館であるとか、シンガポールの孫文故居記念館であるとか、他の施設も含め調べればいろいろ例があると思うので、他の博物館がどのような運営を行っているのか事例を調べさせていただいて、第3回の時の議論の素材にさせていただければと思っている。

(委員)収蔵庫のスペースはどういうふうに使われているのか。

(事務局)当該施設では収蔵専用の収蔵庫とかは長崎歴史文化博物館にお願いしないといけない。それから、博物館法の関連であるがこの辺をクリアするにおいても、長崎歴史文化博物館との連携がないといけないと思っている。

(委員)事務局がどのように資料の収蔵、保存環境が非常に重要であるので、長崎歴史文化博物館はその点完備しているので、そこで収蔵するのが一番いいと思う。さらに、調査研究機能は長崎歴史文化博物館としてきちんと位置づけていくと、そういう意味ではマンパワーの問題が出てくる。現在近代史を研究する学芸員が現時点でいないが、この辺の養成も一つの課題になってくる。

(委員)博物館に近代史の研究を行う学芸員がいないと同時に長崎の大学にもいない。だから、これは博物館だけの問題だけではなくて、長崎に近代のことがわかる人材を確保することが非常に大切である。

(委員)長崎にとってこれから観光を歴史で売ろうとしているのに、コアになる人がいないというのが、展示場の問題よりも先にやるべきという話である。

(委員長)本日いただいた数多くの意見を基に、ワーキング会議等で検討し、第3回委員会で施設の持つ機能として提案をお願いする。

以上